



ふしゃくしんみょう

生活の中の仏教語

「不惜身命」

曹洞宗布教師 東海 泰典 師

若貴ブームの相撲界にあって、かつて兄弟が切磋琢磨し互いにその技量を伸ばし最後は横綱まで上り詰めた花田兄弟。弟の花田光司こと貴乃花が横綱昇進の際に「横綱の名を汚さぬよう、不撓不屈の精神で相撲道に不惜身命を貫きます。」と口にして、広く世間に知られるようになった。不惜身命とは身命を惜みせず・・・全てを投げ打って相撲道に専念する意気込みを表現したのであろう。相撲も仏教に由来した言葉であるがここでは触れずにおく。

「不惜身命」とは仏道を修めるにはみずからの身命をもちかえりみないということであり、そのような態度を言っている。かの有名な達磨大師(インドから中国に禅を伝えた)に弟子入りをお願いした慧可大師は再三断られ、大雪の中その教えを請い自身の決意を示すために己の腕を切り落とし達磨大師に差し出したという。これは身命を惜みせず全身全霊でその意気込みを表したものである。

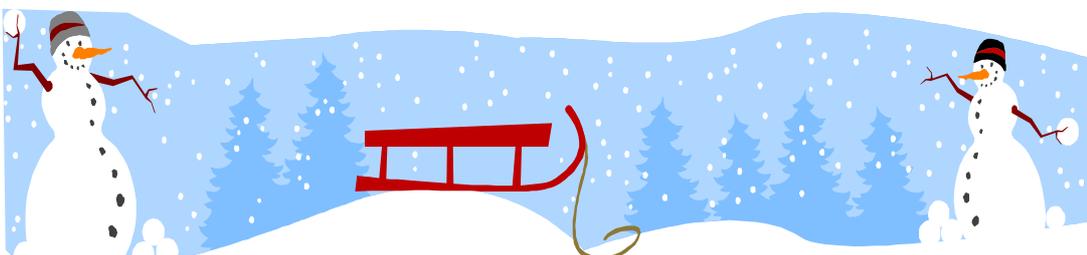
大本山永平寺を開かれた道元禅師さまは『閑らに過す月日は多けれど道をもとむるときぞすくなき』という句を詠まれている。その意味は「毎日の生活を、閑かにふりかえてみよう。それは実に、空しい日おくりの、くり返しとってよい。仏の教えに合い、まっしぐらに、成仏(人間完成)への道を歩むことは、人と生まれたもののつとめである。ところが、どういうものか、自分の欲望のみにふりまわされて、その使命を怠り、ほんとうの生き方を、すすんで求め励むことをしていない。」(『草の葉』 道元禅師和歌集 大山興隆著)

これは人が人として人の歩むべき、ほんとうの道を実践することの難しさ、そして、一日一日の尊さを示したものである。それでは、ただ一度の人生を生きている私たちはどう生きれば良いのか？命を懸けてまで伝えられてきた仏さまの教えとは何か？

私達の人生も不惜身命を貫いていきたいものです。

曹洞宗 宮城県布教師協議会会員

(仙台市 松源寺副住職)



葬にまつわる体験談

「 来 世 」

[福岡県 男性 68歳]

血液の病気の叔母が、あと四、五日の生命であると、医者から宣告された翌日、私は病院に叔母を見舞った。死期の近づいた病人に対するあいさつは苦痛である。研ぎ澄まされた特有の神経には、あいまいな慰めの言葉などは通用しない。私が病室に入ると、叔母は憔悴しきった顔に無理な微笑をして私を迎えた。私は軽く頭を下げ、椅子に腰をおろした。そして、沈黙が続いた。

「死んだら、どうなるかね。」

叔母がぼつりと言った。私は返事に窮した。

叔母は不幸な人だった。若い頃から苦勞し、最初の結婚は一年で死別、再婚は、相手はいい人だったが、身体障害者だったし、子供にも恵まれなかった。不幸はまだ続いた、再婚の夫が死んだ。不幸を一人で背負ったような叔母だった。叔母は死期を悟ったようである。私はもう、叔母には生半可な慰めより、その質問には素直に答えるのがいいと思った。「そうだな、来世はあると思うよ。私は近頃そう信じるようになったよ。来世では先に逝った人たちに逢えるしさ、たのしいと思うよ。私もいつかは行く時が来るだろうけど、その時はお土産を持って行きたいよ、話のお土産をいっぱい持ってさ。みんな喜ぶと思うよ、きっと。」

つい、私はそんなことを云ってしまった。

「お土産をね・・・ほんとね、みんなに逢えるね。」

叔母は自分に云い聞かせるように云った。

医者が云ったように、叔母はそれから二日後に亡くなった。人は死期を悟るとあの世に旅立つその瞬間まで、来世を信じるのではないだろうか、私もそう思いたい。

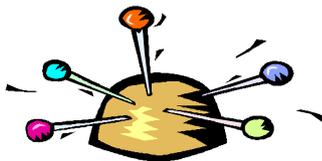
不幸であった叔母は、たのしい来世を期待したのではなからうか。もし、来世が存在するならば、叔母は、今度こそしあわせになって欲しいと心から願うものである。

[セキセー（葬にまつわる体験談）引用]

JA葬祭インフォメーション

寒中にはめずらしく、うららかな日が続いております。日頃JAの葬祭事業にご理解を賜り心より御礼申し上げます。『JA古川葬祭センター』では日頃皆様から頂きますご意見、ご質問を参考に葬儀に関するさまざまな情報を提供して参ります。

さて、今回は『針供養』についてです。「お裁縫の上達を祈って針に感謝！」という気持ちをいつの時代も忘れたくないものです。



『針供養』とは・・・折れた縫い針を供養し、神社に納めて感謝する行事のことです。2月8日が一般的ですが12月8日に行う地域もあるようです。昔の針仕事は女性にとって重要な仕事。普段固いものばかり刺しているから、やわらかい豆腐やこんにゃく刺して休ませてあげたようです。